

第 63 回神奈川建築コンクール 住宅部門最優秀作品選評  
「ミキハウス」

審査委員 古賀 紀江

細やかな思いやりと想像力に満ちた、考え抜かれた自然体の家である。建築家が自分と家族のために、2年間敷地のそばに住み込んでデザインを練ったという自邸には、豊かで多様な生活の「場」が創造されていて、審査書類で見るとよりずっと豊かな印象を受けた。

既存の雑壇造成地に建てられた、この住宅には3つの「つながり」のデザイン手法が認められる。

「つながり」のデザイン手法の一つは、既存雑壇造成地の敷地の扱いである。前面道路側の擁壁上部の間知石をはつるという減築によって、通りと敷地内の視線を繋げる工夫を施した。駐車スペースは、建物の前面に配され、そのまま建物に沿ったアプローチの一部を構成する。さらに、設計者は道路面から敷地奥に至る 1500 mm の高低差を生かして、土地なりの床高で室内を構成した。段状の床で構成される平面構成は、景観でも周囲との良いつながりをもたらしている。この「段床」による空間構成が、「つながり」のデザイン手法の二つ目である。道路側の一番低い「アトリエ段床」から最奥の畳敷きの「室」に至る 11m 程の長いワンルーム空間が4つの段床で構成される。床レベルと距離の組み合わせが個々の段床にできる空間のボリュームを決定し、生起する個々の「場」の柔らかなつながり作りに貢献する。上階部分でも同様の手法が生かされていて、1, 2 階の各段床は道路や庭、そしてテラスへと直接の繋がりを持ち、生活の場が豊かに広がっていた。

そして、この家の真骨頂は窓の「計画」にある。全ての窓の位置や大きさは、隣家との関係性や景色、道行く人の視線等に関する丁寧なスタディから決定された。専用住宅地の計画では、『単純に周囲に開け広げた建ち方ではなく、適切な開き方と距離感を持つ』ことがマナーであるとする設計者の言葉は、今日の社会への提言として受け取るべき価値がある。自分だけではなく他者を思いやるという、ごくあたりまえのことがもたらす効果は持続可能なまちづくりにも波及するはずだ。

本作品が言外に提言する雑壇造成地における「つながり」のデザイン手法は、自然豊かで起伏に富んだ地形を特徴とする神奈川県に住まい環境の質の向上に資する、優れた社会性を有する手法として最大限の賛辞に値する。